



## 👁️👁️ みどころ

イタリアのアカデミー賞で最多5部門を受賞した本作は、冒頭から棺桶の中の死体が急に歌い始めるのでビックリ！本作はノワール？アクション？ロマンス？それともミュージカル・・・？

それをごちゃまぜにした(?) 本作は、邦題のとおり“愛と銃弾”がテーマだが、愛の面でも銃弾の面でも、少し異和感がある。それを超えるハードボイルドタッチの面白さが受賞の理由だろうが、ラストで急浮上する“男の友情”にも注目したい。

もっとも、その後の“付録？”と“種明かし？”を、あなたはどうみる？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■受賞多数のイタリアの話題作はミュージカル！？■□■

2018年のイタリア・アカデミー（ダヴィッド・ディ・ドナテッロ）賞で最多15部門にノミネートされ、最優秀作品賞ほか最多5部門を受賞したイタリア映画が本作。そう聞くと、こりゃ必見！

冒頭スクリーンいっぱいに映し出される舞台は、“ヴェスヴィオ火山を望み、太陽もマフィアも元気な南イタリアの大都市ナポリ”らしい。都市問題をライフワークにしている私はそんな美しい風景に大いに興味があるが、ストーリーはものものしい警備体制が敷かれている、とある教会での葬儀のシークエンスから始まる。夫ヴィンチェンツォ（カルロ・ブッチロッソ）の死を大仰に嘆き悲しむ若妻のマリア（クラウディア・ジェリーニ）の姿はどこか嘘っぽい。そう思っていると、案の定、動き始めた車の棺桶の中に入っている死体のヴィンチェンツォが急に歌い始めたから、ビックリ！このイタリアオペラ風の歌い回

し(?)はお見事だから、本作はひょっとしてミュージカル!?ちなみに、本作のチラシには、「才気みなぎる鬼才エンタテイナー、マネッティ・ブラザーズが放つ痛快傑作!それはノワールか、アクションか、ロマンスか、いや、ミュージカルなのか?」と書かれていたが、予告編を見ても邦題を見ても、私はてっきり本作は前3者の範疇、すなわち、ノワール、アクション、ロマンスの映画だと思っていた。しかし、冒頭のシーンを観ると、本作はやっぱりミュージカル・・・?

本作のストーリー構成上のキーウーマンになるのは、看護師のファティマ。この役を演じる女優セレーナ・ロッシはあまり美人ではないが、ミュージカルでデビューし、歌手としてアルバムをリリースしているそうだから、本業は女優より歌手。したがって、劇中での彼女の歌唱力は抜群だ。男性陣の歌声も悪くないが、銃を向け合った男同士が急に歌い始めるシークエンスにはやはり異和感がある。今から約55年前、私が15歳の頃に観た美しいミュージカル映画『ジェルブールの雨傘』(64年)もかなり異和感があったが、2人の美人女優の美しさにうっとりすることで魅力いっぱい映画になっていた。しかし、70歳になった今、この手のミュージカル映画(?)はさて・・・?

## ■□■「魚王」が襲撃!若妻の世間を欺く“計略”とは?■□■

新年恒例の東京豊洲市場でのマグロの初セリでは、今年もすしチェーン「すしざんまい」を展開する喜代村の木村清社長がセリ落とししたが、その額は何と3.3億円。2013年の初セリで記録した過去最高の1億5540万円を大幅に上回るものだ。もちろん、これは商取引の価格としてはべらぼうだが、木村社長の狙いはあくまで宣伝効果にあるらしい。

しかして、本作にナポリの水産市場を仕切る「魚王」として登場するヴィンチェンツォは、言ってみれば喜代村の木村社長のようなものだ。そう思っていると、冒頭のお葬式のシークエンスの次は、このヴィンチェンツォがギャング団(?)に襲われるシーンになる。懸命に身を隠したが、お尻だけは隠れていなかったため、お尻を撃たれてしまったヴィンチェンツォの危機を救ったのは“タイガー”と呼ばれるクールな殺し屋チーロ(ジャンパオロ・モレリ)とロザリオ(ライツ)。2人とも、ヴィンチェンツォとマリアに仕える忠実な部下(愛犬?)だ。

銃弾がめり込んだ(?)お尻の治療は大変そうだが、そこでヴィンチェンツォが「魚王」としての第一線の活動の大変さを嘆く姿を見て、マリアはある“とんでもない計略”を思いつくのが本作のミソ。それは、ギャング団からの襲撃でヴィンチェンツォが死亡したことになり、余生をヴィンチェンツォと2人でゆっくり過ごすことだ。魚市の事業や不動産はチーロとロザリオたち“側近”にタダで譲っても、ダイヤさえあれば贅沢三昧の暮らしは十分。当初はマリアのそんなとてつもない提案に戸惑っていたものの、それは妻が自分を愛してくれているがゆえの前向きな提案だとわかると、ヴィンチェンツォもそれに納得した。もう1つ、そんな計画をうまく進めるためには、ヴィンチェンツォの“そっくりさん”をヴ

インチェンツォの代わりに棺桶の中に入れる必要があるが、それはマリアが以前から目を付けていたらしい。世の中には時々そっくりさんがいるもので、“あの男”なら……。しかして、マリアはロザリオに命じて、その“そっくりさん”を射殺し、まんまとヴィンチェンツォの身代わりとして棺桶の中に入れることにも成功。

すると、これから大切なことは、ヴィンチェンツォが死んだという嘘の情報を世間に信じさせること。マリアはチーロやロザリオたち側近にそのことを確約させ、テレビではヴィンチェンツォ死亡のニュースが流れたから、これにて万々歳だ。検死やお別れの際、さすがにヴィンチェンツォの母親だけは、くちびるの形が少し違うみたいなどと言い始めたが、そこはマリアの演技力でカバーし、まんまと冒頭にみたヴィンチェンツォのお葬式のシークエンスと相成ったわけだ。しかして、その後のストーリー展開は？

## ■□■ “家政婦は見た！”ならぬ、“看護師が見た”ものは？ ■□■

昨年9月15日の名女優・樹木希林の逝去に続いて、今年1月12日には女優市原悦子が82歳で逝去した。彼女の代表作の1つが『家政婦は見た！』シリーズだが、本作では一夜限りの代役で夜勤をしていた看護師のファティマ（セレーナ・ロッシ）が偶然目にしたものが物語を牽引する出発点になるので、“家政婦”ならぬ“看護師ファティマ”が見たものに注目！

ファティマが見たのは、銃で撃たれたお尻の治療のためベッドでうつ伏せになっているヴィンチェンツォの無様な姿だ。麻酔が十分効いていない状態のヴィンチェンツォは、マリアが買収した医師しか知らないはずの秘密の部屋に看護師が入ってきたことにビックリ！ヴィンチェンツォからそれを聞いたマリアは冷酷非道な女だから、マリアがチーロとロザリオにファティマの殺害を命じたのは当然だ。ギャング団に襲撃されたヴィンチェンツォを救出したチーロやロザリオたちプロの殺し屋の手腕からすれば、ファティマの抹殺などチョロいもの。それはその通りだが、追い詰められたファティマと追い詰めたチーロが顔を合わせると、何とこの2人は昔の恋人同士だったから、アレレ……。ファティマはこの再会を泣いて喜びチーロにすがりついたが、ボスのヴィンチェンツォと女ボスのマリアから看護師の殺害を命じられていた殺し屋チーロはさあ、どんな選択を？

本作は前述のとおりミュージカルでありながら、ノワールとアクションの要素がふんだんに盛り込まれた面白い展開だったが、ここで俄然ロマンス色が浮上してくることになる。しかし、この局面で、両ボスや組織そして盟友のロザリオを裏切り、昔の恋人のファティマと一緒に逃げるという決断をしたチーロの選択があまりに唐突すぎるため、私にはかなり異和感が。そして、その異和感は2時間14分の本作ラストまでずっと続くことに……。

## ■□■ この男はメチャ強い！ その“銃弾”が次々と！ ■□■

塚本晋也監督の『斬』（18年）は、剣の達人でありながら剣で人を切ることをためらう

若侍を描いていた。また武正晴監督の『銃』（18年）は、偶然拾った銃を飾っておくだけで自分に自信を持つ若者を描いていた。しかし、邦題を『愛と銃弾』とした本作では、チーロとファティマの「絶望の逃避行（?）」と思える“愛”もさることながら、チーロの銃から次々とぶっ放される銃弾の威力が顕著なので、それに注目！さいとう・たかをの劇画で有名な『ゴルゴ13』でも、超一流のスナイパー（狙撃手）「ゴルゴ13」ことデューク東郷の銃弾の威力が際立っていたが、本作ではチーロの無二の親友であるロザリオは別格として、その他のヴィンチェンツォの子分たちに比べると、殺し屋としての力量は圧倒的にチーロの方が上らしい。したがって、ファティマから「私と離れないで！」と言われて手錠をかけられるという異常事態の中でも、チーロはヴィンチェンツォの追手たちを次々と銃弾で血祭りに上げていくから、その腕前に注目！もっとも、これは映画なればこそそのアクション。手錠でつながれた右手首を血だらけにしなが、左手一本で十数名の追手を全員やっつけてしまうというアクションは、さすがに少し現実味に欠けるくらいが・・・。

## ■この伯父さんだけは俺の味方！そう思っていたのに！■

本作邦題の“愛”（ロマンス）の面は、チーロとファティマがあり得ない状況下で再会したことによって“愛の逃避行”という形で展開していくが、銃弾（ノワールとアクション）の面は、圧倒的なチーロの強さでストーリーが進んでいく。そこで、ボスや親友たちの裏切りとファティマとの逃避行という究極の選択をしたチーロの手助けをした男が、チーロの伯父さんだ。伯父さんがなぜそんなにチーロの言うとおりに動いてくれたのかについては2人間の古い因縁（?）があるようだが、この伯父さんはなかなか優秀だ。

しかし他方で、チーロの裏切りを知ったヴィンチェンツォやマリアたちの怒りは相当なものだし、彼らも決してバカではないから、ロザリオを中心とするチーロ追討の部隊が組織的に展開すればその力は相当なもの。そのため、チーロの逃避行の手助けをしている男がいるらしいことがわかると、その情報網は次第に狭められ、チーロの伯父さんの名前が浮上してくると、自宅に1人で過ごしていたこの伯父さんの一人娘に対してヴィンチェンツォたちの追手が差し向けられることに。このように、愛する一人娘を人質に取られたのでは、伯父さんのチーロへの協力ももはやそこまで。そうなったのは仕方ないが、それによって包囲網が狭まってしまったチーロは、そこで如何なる底力を・・・？そして、この伯父さんだけは俺の味方！そう信じていた伯父さんに裏切られたチーロの報復は？

そんな展開を経て、本作ラストのクライマックスは、ついにチーロを追い詰めたロザリオとチーロ2人だけの対決に！

## ■2人の対決は？“付録？”と“種明かし？”の是非は？■

羽生善治竜王が勝利して通算100期のタイトル獲得か？それとも、敗北してかつての7冠王から無冠への転落か？そんな世紀の決戦が2018年12月20日、21日に行わ

れた第31期竜王戦七番勝負の第7局だった。その舞台は山口県下関市「春帆楼」。ここは、かつて宮本武蔵と佐々木小次郎が戦った“巖流島の決闘”の舞台として有名なところだ。巖流島の決闘は宮本武蔵が勝利したが、さて竜王戦の結果は？本作ラストのクライマックスは、その“巖流島の決闘”や“竜王戦の決戦”と同じような(?)、ナポリの海岸でのチーロとロザリオの2人だけの決戦になるので、それに注目！

本作は、前述の通りノワール？アクション？ロマンス？いやミュージカル？の映画だが、このクライマックス対決では“男の友情”という新たなテーマが急浮上してくる。つまり、チーロが持つ銃の銃口がロザリオに向けられているため、ロザリオの銃はすでに砂浜に捨てられていたが、そこでチーロはすぐには撃たず、伯父さんが救助に来るボートに乗って逃げるよう強く求めるわけだ。これは長年、殺し屋チーム“タイガー”の盟友だったロザリオを殺したくないという、チーロの親友への思いだが、既にチーロによって自分の部下たちを全員殺されてしまったロザリオが、おめおめとこの進言に乗るわけにいかないのは当然。その結果、若干ライラするような男同士の会話が続くが、その結末はちょっとしたハプニングも含めてチーロの銃弾がロザリオに発射されるので、これにて本作は“愛も銃弾”もチーロの勝利に終わることに。

誰が見ても本作はそんな結末だが、何と本作はその後さらなる“付録(?)”と“種明かし(?)”が続いていくので、それに注目！それをここで書くことができないのは当然だから、その展開は“その是非”を含めてあなた自身の目でしっかりと！

2019（平成31）年2月8日記